

研究区分	教員特別研究推進 教育推進
------	---------------

研究テーマ	日本語を母語とする英語学習者による非対格動詞の過剰受動化の誤りに関する研究				
研究組織	代表者	所属・職名	国際関係学部・助教	氏名	岡村 明夢
	研究分担者	所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
	発表者	所属・職名	国際関係学部・助教	氏名	岡村 明夢

講演題目	
非対格動詞の過剰受動化を引き起こす要因の比較	
研究の目的、成果及び今後の展望	
<p>本研究の目的は、英語非対格動詞の過剰受動化の誤り(*The accident was happened.)を引き起こすと考えられている複数の要因の内、どの要因が最も強く誤りに影響を及ぼすのかを明らかにすることである。今のところ、誤りを引き起こす要因に関しては、①概念的に認知可能な動作主の存在、②主語の有生性、③動詞の持つ完結性、④対応する日本語動詞における他動詞用法の有無、の4つが提案されている。しかし、これら複数の要因を比較した研究はほとんど行われておらず、それぞれの要因が過剰受動化にどの程度強く影響を及ぼすのかわかっていない。</p> <p>この点について明らかにするために、本研究では、以下の4つの実験を行った。</p> <p>(1) 実験1：主語の有生性と、概念的に認知可能な動作主の存在の比較 (2) 実験2：概念的に認知可能な動作主の存在と、動詞の完結性の比較 (3) 実験3：主語の有生性と、対応する日本語動詞における他動詞用法の有無の比較 (4) 実験4：概念的に認知可能な動作主の存在と、日本語動詞における他動詞用法の有無の比較</p> <p>それぞれの実験では、要因を2つずつ比較し、調査対象外の要因の影響を排除しながら選択強制タスクを実施した。</p> <p>これらの実験の結果から、4つの要因の内、主語の有生性は最も強く過剰受動化に影響し、概念的に認知可能な動作主の存在は2番目に、対応する日本語動詞における他動詞用法の有無は3番目に強く影響するが、動詞の完結性は過剰受動化に影響しないことがわかった。しかし、実験3と4の結果から、日本語への訳出のバリエーションによって、過剰受動化が起こる割合が異なる可能性が示唆された。それゆえ、今後の研究では、学習者が非対格動詞をどのような日本語に訳すのかを調査し、再度日本語の影響について調べる予定である。</p> <p>また、本研究の実験結果にもとづき、日本の外国語教育において、英語の動詞分類や受動態の構造をどのように指導していくべきかの示唆を提示した。英語教育では、過剰受動化を引き起こす要因に関連させながら、教員が英語の動詞分類や受動態の構造を指導するべきであると議論した。しかし、本研究では、明示的な文法指導の有効性を直接調べたわけではない。今後の研究では、実際に学習者を対象に文法指導を行い、その指導が過剰受動化の軽減に効果があるのかを調査する予定である。</p>	